



地域・ユーザーの声 河口堰だより

地域を守る潮止堰 改善対策について

(執筆者)
猪子市木道部
浄水課長
宮内 康雄

「黒部川の水質改善対策について」

飲料水としての水道水に変化が現れていると聞きます。蛇口離れが進み、ボトルウォーターの販売量はうなぎのぼりのようになります。(世界の国々と比較すると絶対量においては、まだ少ないですが)このような状況は、考えられます。その要因はいろいろあるとされていますが、生活水道事業に身を置く者には、複雑な気分にさせられます。その要因は、多様化や味へのこだわり、様々な水質汚染の状況や水道の安全性に対する不満等が挙げられます。その結果、急増する市勢の下で生物活性が難しくなります。また、本市の水道は、昭和13年に給水を開始して以来、本市の水道は、水質汚染の状況や水道の安全性に對する不満等が挙げられます。その対策に苦慮してしまいました。

河口堰だよりは、黒部川の水質改善対策について、河口堰の目的・役割など、写真をまじえて紹介されています。パンフレットは、展示室に置いてありますので是非ご利用ください。

発行所
独立行政法人水資源機構
利根川下流域総合管理所
利根川河口堰管理所
TEL 0478-86-0477

河口堰展示室



水道水源である黒部川



河口堰展示室



情報交換会の様子

利根川河口堰をより理解してもらうため、子供向け(小学生を対象)パンフレットを職員の手作りにより作成しました。河口堰の目的・役割などが、写真をまじえて紹介されています。

パンフレットは、展示室に置いてありますので是非ご利用ください。

当管理所において、利根川下流域本源対策協議会との情報交換会を6月21日(木)開催しました。

生物図鑑 川のキャング シラサギ



「シラサギ」とは白い羽毛をもつサギ類の総称のことです。ダイサギ、チヌサギ、コサギのことを指します。遠くから一看しただけでは、何サギなのだと判別が難しいのですが、シラサギだと言えます。羽をもつサギ類の総称のことで、シラサギだと言えば間違はないません。

河口堰の周辺ではたくさんのシラサギを見ることができ、望遠鏡で利根川を見ると、だいたい、いつも魚道の付近など、同じ場所で休んでいます。



利根川右岸魚道付近にて

河口堰フェンスター2006にご来場下さいました皆様、ありがとうございました。皆様からいただいたアンケートを来年の参考にさせていただき、より一層皆様に喜んでもらいたいと思います。お越しいただけるイベントにしていきたいと思つております。またのお越しをお待ちしております。

編集後記

(編集担当者)

この広報紙に関するご意見・ご感想、並びに利根川河口堰へのご質問等は下記までお寄せ下さい。また、施設見学も受け付けています。下記までご連絡ください。
TEL 0478-86-0477
FAX 0478-86-3487
E-mail : tonekako@topaz.ocn.ne.jp



河口塙フェスタ2006

さ」をテーマに、「子どもから大人まで学習できる体験型」「ナード船模型展示会」「上廉設見学」、操作室見学を行うとともに、無人船・上廉コートナーニーによる河口堰の役割をバネル展示や、ピアオ上映で紹介しました。

また、新たに水資源利用用水による水の利用実用のバネル展示や利根川・荒川の上流にある水資源施設の写真展示などを行いました。

当日は、風が強く職員手作りののぼりや風船飾りが風に舞う暑い日でしたが、体験コーナーでは、力合をさして降雨量の強さを感じる涼しげな体験に、はしゃぐ染や、真剣な眼差しで墨部川・利根川などから採水した水の水質検査を行った小学年の児童が見られました。

一方、見学コーナーでは普段は見ることのないりんにある操作室の水門を動かす装置の



ほさんや、子供達は、高いところから見る雄大な利根川や水門の大さに驚いたり、遠くに見える発電風車に感動していました。

福島正臣



真剣に水質検査を行う子供たち

シガフタを通して健
康増進、参加者相互の
融和を図るとともに、
自然を愛し自然共生か
し、地域活性化に寄与
することを目的として、
ホートを通じて、韓技
の普及から、河川意識
の精神を培い、自然環

7月30日(日)に管
理所構内にて、二河口堰
ブースタ2008上継
打つて「水の週間」に
もなんだ行事として
施設内を一般公開し、
地域を守る潮止め堰と
して果たしている利根
川河口堰の役割のビー
アールを行なうとともに、
地域に親しまれる水資源
活用をを目指し、水の
週間イベントを洲崎一
ました。

短信・河口堰
河口堰フェスタ
2006報告



常山縣志

利根川下流沿川緑行



四

神崎の森は、利根川沿いの小高い丘にあり、かつて舟運の盛んな頃はこの台地が先端状となり上下龍が急な曲がりよなついていたため、ここを航行する舟人たちの日印しにもなつていたらしく「ここは神崎森の下、船をよくどれ船頭どのよ、主の心と神崎の森は、なんにをもんじやで気が知れぬ」と歌われてきた。またこの森は良い間、神城として人手が加わっていない極相林となつてしまい、県指定の天然記念物に指定されている。森の中にある神社の社殿右にある「クスの木」は四指さの天然記念物になつており、主幹は明治40年に火災で

焼け、高さ 7 m 程で切断されたが、その根本から木の「ひこばえ」が粗木を取り巻くようじ良く育ち、幹周 8・5 m、高さは 20 m になつていて。この一タスの木は伝説によれば、水戸黄門が神社に参拝した折と、この木は何というもんじゅるうか」と自問されて以降、「アンジャモンジャ」と名付けられたと言わかれている。

滑川觀音
(龍正院)



卷之二

滑川根音（龍正院）
伝説によると寺の始まりは八二八年。慈覚大師によるとの事で、ある年の五月この地方に時ならぬ冷害で穀物は実らず亂え死にする人も出る程であつた。當時、庶主であつた小田得治はこのあしさまで衰れみ、お金や穀物を施し、更に根音を会見し、天候の回復を祈った。その時一人の少女が現れ、「汝の願い叶うべし」と言つた。不思議に思い、後を追い田川の朝日ヶ淵までくると、舟に乗った老僧が衣を纏の代わりにして投げ入れて、引いてみると中に根音像があり、それを僧が渡して立ち去つた。彼はそれを持ち去り、

堂を建て安置すると玉
供も回復し農作が続いた
という。この観音像
が今の本尊で3・5cm
の小さなものといわれ
後に佛師、定期によつて
て作られたという高さ
4m程の大觀音像の脇
内に納められていると
のことである。



卷之三



一生懸命清く選手